



第4章

保護者に対するWEBアンケート

第4章 保護者に対するWEBアンケート

本章では、WEBにより実施したアンケートの結果をもとに、子どものICTメディアの利用状況に対する保護者の意識を確認する。

以下では、調査の概要を見たうえで、所持率・利用頻度、保護者の関与、保護者が意識するメリット・デメリット、「メディアを活用する力」の教育について、携帯電話/パソコンの別に分析を進めていく。

なお、本章の分析は、WEBアンケートの結果に基づいている。そのため、WEBアンケートという特性が、ICTメディアの利用実態や、保護者の子どもに対する働きかけ、ICTメディアに対する意識などに、影響を及ぼしている可能性があることには留意しておく必要がある。

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

子どものICTメディア利用については、利用環境という側面からも、具体的なしつけや教育的な働きかけという側面からも、家庭の関わりが非常に大きいものと考えられる。そこで、保護者を対象にして、子どものICTメディア利用に関する調査を実施し、子どものICTメディアの所持率や活用状況といった利用実態、子どもへの働きかけといった保護者の行動、利用する際の懸念点といった保護者の意識などを、おもに定量的に把握する。

(2) 調査方法

インターネット調査。

(3) 対象者条件と抽出方法

対象者条件

小学校1年生から中学校3年生の子どもをもつ保護者1,800名。

抽出方法

エヌ・ティ・ティ・ナビスペース株式会社の保有するモニター会員から、1学年につき200名ずつになるように対象を抽出した。

(4) 調査時期

2006年3月10日～13日。

調査項目ならびに調査対象の基本属性は、表 4 - 1 - 1 に示している。

表 4 - 1 - 1

調査方法	インターネット調査
調査時期	2006 年 3 月 10 日～13 日
調査対象	小学校 1 年生から中学校 3 年生の子どもをもつ保護者 1,800 名（有効回収数） 小学校 1 年生から中学校 3 年生まで、各 200 名ずつになるように抽出
調査項目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの携帯電話利用の実態 ...所有の有無、きっかけと時期、利用頻度、所有希望の有無 ・ 子どもの携帯電話利用に関する保護者の意識・行動 ...保護者としての取り組み、もたせてよい時期、保護者が感じる携帯電話のメリットとデメリット ・ 子どものパソコン利用の実態 ...利用の有無、利用頻度 ・ 子どものパソコン利用に関する保護者の意識・行動 ...保護者としての取り組み、保護者が感じるパソコンのメリットとデメリット ・ 「メディアを活用する力」の教育に関する保護者の意識 ...「メディアを活用する力」の教育主体、教育内容 ・ 保護者の携帯電話とパソコンの利用実態 ...携帯電話とパソコンの利用の有無、携帯電話とパソコンの利用目的・頻度
調査対象の基本属性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもとの続柄.....父親 54.7%、母親 45.2%、その他 0.1% ・ 子どもの性別.....男子 53.4%、女子 46.6% ・ 子どもの父親の年齢.....平均 42.7 歳 ・ 子どもの母親の年齢.....平均 40.1 歳

2. 携帯電話やパソコンの所持率・利用頻度

最初に、携帯電話やパソコンの利用状況について確認していくことにする。第1章でも概観したように、これらのICTメディアは世帯に広く普及している状況にあるが、子どもたちはどれくらいの割合で所持し、どれくらいの頻度で利用しているのだろうか。本節では、保護者にたずねた結果から、携帯電話とパソコンの所持率や利用頻度について検討する。

(1) 携帯電話

利用状況

表4-2-1は、「あなたのお子様は、携帯電話をもっていますか」という質問項目に対する結果を表したものである。つまり、調査対象となった小学1年生から中学3年生までの携帯電話の所持率を示している。全体では、「自分専用の携帯電話をもっている」24.8%、「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」5.1%、「携帯電話はもっていない」70.2%となっている。

性別ごとの特徴はどうだろうか。表4-2-1を見ると、男子よりも女子の方が「自分専用の携帯電話をもっている」比率が高く（女子28.5%>男子21.5%）、逆に「携帯電話はもっていない」比率が低くなっている（女子65.3%<男子74.4%）。

さらに、女子の保護者の方が「子どもがもちたがった」と回答している。表4-2-2は、「お子様が携帯電話をもつようになったきっかけ」を、子どもの性別に見たものである。「親がもたせた」（「親がもたせた」と「どちらかという親がもたせた」の合計）は男子で63.4%、女子で52.9%と、女子の方が10ポイントほど低い。これに対して、「子どもがもちたがった」（子どもがもちたがった」と「どちらかという子どもがもちたがった」の合計）は、男子で30.9%、女子で36.4%と、女子の方が5ポイント程度高くなっている。

さらに、表4-2-3は、子どもが携帯電話を所持していない場合に限り、「あなたのお子様は携帯電話をほしがることがありますか」とたずねた結果を性別に示したものである。これを見ると、現在携帯電話を所持していない子どものなかでも、女子の方が男子より「ほしがっている」子どもが多くなっている（女子49.2%>男子33.7%、「いつもほしがっている」と「ときどきほしがっている」の合計）。

利用頻度はどうだろうか。表4-2-4は、「あなたのお子様は携帯電話をどのくらい頻繁に使っていますか」という質問に対する回答を子どもの性別で示したものである。これを見ると、保護者が認識する子どもの携帯電話の利用頻度は、女子の方が若干高くなっている。「かなり使っている」と答えたのは男子が21.1%なのに対して、女子は27.1%と、6.0ポイントの開きがある。また、「かなり使っている」と「まあ使っている」を合わせた場合でも、4.3ポイントの開きが見られる（女子69.7%>男子65.4%）。

以上より、女子の方が「自分専用の携帯電話」の所持率が高く、また子どもが積極的にもちたがっていることが分かる。利用頻度に関しても、女子の保護者の方が若干高いと認識している。

表 4 - 2 - 1 携帯電話の所持率 (全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
自分専用の携帯電話をもっている	24.8	21.5	28.5
家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている	5.1	4.1	6.2
携帯電話はもっていない	70.2	74.4	65.3

表 4 - 2 - 2 携帯電話をもつきっかけ (全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
親がもたせた	57.7	63.4	52.9
どちらともいえない	8.4	5.7	10.7
子どもがもちたがった	33.8	30.9	36.4

*携帯電話の所持に関する質問で「自分専用の携帯電話をもっている」「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者のみが回答。

*「親がもたせた」は「親がもたせた」と「どちらかという親がもたせた」の合計 (%)。

*「子どもがもちたがった」は「子どもがもちたがった」と「どちらかという子どもがもちたがった」の合計 (%)。

表 4 - 2 - 3 子どもが携帯電話をほしがることがあるか (全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
いつもほしがっている	7.6	5.7	10.0
ときどきほしがっている	32.9	28.0	39.2
あまりほしがっていない	26.0	26.2	25.7
まったくほしがっていない	33.6	40.1	25.0

*携帯電話の所持に関する質問で「携帯電話はもっていない」と回答した者のみが回答。

表 4 - 2 - 4 携帯電話の利用頻度 (全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
かなり使っている	24.4	21.1	27.1
まあ使っている	43.4	44.3	42.6
あまり使っていない	30.7	31.7	29.9
まったく使っていない	1.5	2.8	0.3

*携帯電話の所持に関する質問で「自分専用の携帯電話をもっている」「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者のみが回答。

学年ごとの特徴

では、所持率や利用頻度は、学年別に見たときどのような傾向があるだろうか。「あなたのお子様は、携帯電話をっていますか」という質問の結果を学年別に示したものが、表4 - 2 - 5である。学年が上がるにつれて「自分専用の携帯電話」の所持率も高くなり、小1生と中3生では60ポイント近く差が開く（小1生6.5% < 中3生64.0%）。とくに中学生になると、所持率の増加も著しい。小6生で21.5%だった所持率は、中1生で37.5%、2年生で49.5%、3年生で64.0%と、急激に上昇する。

また、表4 - 2 - 6は、「はじめて携帯電話をもった学年」の結果を示している。小1生は「小学校1年生」という回答が、小2生は「小学校2年生」という回答が多いというように、中1生まではその学年が最頻値になっている。中1生までは、ごく最近、所持するようになった子どもが多いようである。さらに、中2生では「中学校1年生」が41.1%でもっとも高く、中3生の回答でも「中学校1年生」は29.7%で相対的に見て高い。中学生の結果からは、中学入学によって携帯電話を所持するケースが多い様子が見える。

さらに、「小学校入学以前」から「中学校3年生」まで、どの選択肢にも回答の可能性がある中3生の結果を見ると、小学校段階で所持していた者（「小学校入学以前」から「小学校6年生」までの合計）は18.8%である。とくに低学年段階の数値が低いのは、所持率がもともと低いことに加えて、子どもの携帯電話の所持が現在ほど普及していなかったためと推察できる。中3生は、「中学1年生」（29.7%）と「中学3年生」（37.0%）という回答が多く、ここでも中学入学直後に所持する者と、所持するようになって間もない者が多いことが示されている。

表 4 - 2 - 5 携帯電話の所持率(全体、学年別) (%)

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
自分専用の携帯電話をもっている	24.8	6.5	8.5	5.0	16.5	14.0	21.5	37.5	49.5	64.0
家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている	5.1	3.5	3.0	3.5	2.5	4.0	7.0	10.5	6.5	5.0
携帯電話はもっていない	70.2	90.0	88.5	91.5	81.0	82.0	71.5	52.0	44.0	31.0

表 4 - 2 - 6 はじめて携帯電話をもった学年(全体、学年別) (%)

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
小学校入学以前	0.9	20.0	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
小学校1年生	6.3	80.0	39.1	5.9	7.9	8.3	1.8	1.0	0.0	0.0
小学校2年生	3.7	0.0	56.5	5.9	7.9	2.8	3.5	0.0	0.0	0.0
小学校3年生	6.5	0.0	0.0	88.2	28.9	8.3	5.3	2.1	0.0	0.7
小学校4年生	10.2	0.0	0.0	0.0	55.3	33.3	15.8	4.2	6.3	1.4
小学校5年生	12.8	0.0	0.0	0.0	0.0	47.2	26.3	21.9	4.5	8.0
小学校6年生	13.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	47.4	14.6	18.8	8.7
中学校1年生	26.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	56.3	41.1	29.7
中学校2年生	9.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.6	14.5
中学校3年生	9.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	37.0

*携帯電話の所持に関する質問で「自分専用の携帯電話をもっている」「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者のみが回答。

(2) パソコン

利用状況

次に、パソコンの利用状況にどのような特徴が見られるかを検討しよう。なお、本調査はWEBアンケートであるため、家庭でのパソコン所有率がほぼ100%とかなり高い。第1章で見たように、パソコンの世帯普及率は8割弱（総務省『平成16年通信利用動向調査報告書世帯編』では77.5%、財団法人コンピュータ教育開発センター（文部科学省委託調査）『情報モラルに関する調査報告書』では76.1%）である。この数値から分かるように、多くの家庭にパソコンが普及している状況にあるものの、今回の調査対象はそれよりも所有率が高く、比較的良好にパソコンを利用している層の回答が多いと推察される。この点に留意して分析を進めていくことにする。

最初に、家庭にあるパソコンを、保護者だけでなく子どもも利用しているのかを確認しよう。表4-2-7は、「あなたの家にはお子様が使えるパソコンがありますか」という質問に対する回答結果である。これを見ると、「子ども専用のパソコンがある」が12.8%、「家族共通で使用しているパソコンがある」が74.5%で、合わせて87.3%の保護者は子どもが使えるパソコンがあると認識している。一方、「家にパソコンはあるが子どもは使わない（使わせない）」は1割強にとどまる。パソコンがある場合は、多くの家庭で子どもも利用していることがわかる。

さらに、表4-2-8は、「あなたのお子様は、家でパソコンをどのくらい頻繁に使っていますか」という問いに対する結果である。すなわち、保護者がとらえた子どものパソコン利用状況を示している。これを見ても、「まったく使っていない」子どもは1%にも満たない。これに対して子どもが利用しているケースは、「かなり使っている」と「まあ使っている」を合わせると6割を超える。調査対象者の子どもたちは、家庭でパソコンを利用できる環境にあり、実際に頻繁に利用するケースが多いようだ。

同じ表4-2-8から、子どもの性別の特徴を見てみよう。「かなり使っている」と「まあ使っている」の合計は、男子で66.1%、女子で62.3%となっている。大きな差ではないが、わずかに男子の保護者の方が、利用頻度が高いととらえている。携帯電話の利用頻度が女子の方が高かったが、男子はパソコンの利用頻度が高い。性によって相対的によく利用するICTメディアが、異なる傾向にあるようだ。

表 4 - 2 - 7 パソコン所有状況(全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
子ども専用のパソコンがある	12.8	12.9	12.8
家族共通で使用しているパソコンがある	74.5	72.9	76.3
家にパソコンはあるが子どもは使わない(使わせない)	12.2	13.5	10.6
家にパソコンはない	0.5	0.6	0.4

表 4 - 2 - 8 パソコン利用頻度(全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
かなり使っている	15.4	15.9	14.9
まあ使っている	48.9	50.2	47.4
あまり使っていない	35.1	33.3	36.9
まったく使っていない	0.7	0.6	0.8

*パソコンの所有に関する質問で「子ども専用のパソコンがある」「家族共通で使用しているパソコンがある」と回答した者のみが回答。

学年ごとの特徴

続いて、パソコンの利用について学年別の特徴を見てみよう。表4 - 2 - 9は「あなたの家には、お子様が使えるパソコンがありますか」、表4 - 2 - 10は「あなたのお子様は、家でパソコンをどのくらい頻繁に使っていますか」という質問に対する回答を学年別に示したものである。

表4 - 2 - 9に示されているように、中学生になると、「子ども専用のパソコン」所有率が14.5～19.5%と、小学生(7.5～12.5%)と比べて高くなっている。また、「家にパソコンはあるが子どもは使わない」ケースも、小1生の25.5%から学年があがるにつれて徐々に少なくなり、中学生では4～5%となっている。

さらに、表4 - 2 - 10からわかるように、利用頻度の高い(「かなり使っている」と「まあ使っている」の合計)子どもも、小1生の53.0%から次第に増加し、中3生では77.0%に達している。とりわけ「かなり使っている」という回答の増加が顕著である。「かなり使っている」のは小4生までは10%未満にとどまっているが、高学年になると10%を超え、中学生では22.1～32.5%に達している。

以上より、保護者は、子どもの学年があがるにつれてパソコンを利用できる状況が整い、利用頻度も高くなっているととらえていることが分かる。とくに小学生よりも中学生になると利用頻度が高くなる点は、携帯電話と似た傾向を示している。

表4 - 2 - 9 パソコン所有状況(全体、学年別) (%)

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
子ども専用のパソコンがある	12.8	12.0	10.5	7.5	12.5	10.0	9.5	19.5	14.5	19.5
家族共通で使用しているパソコンがある	74.5	62.5	69.0	73.0	71.5	78.0	83.5	76.5	80.5	76.0
家にパソコンはあるが子どもは使わない	12.2	25.5	19.5	18.5	16.0	10.5	6.5	4.0	5.0	4.0
家にパソコンはない	0.5	0.0	1.0	1.0	0.0	1.5	0.5	0.0	0.0	0.5

表4 - 2 - 10 パソコン利用頻度(全体、学年別) (%)

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
かなり使っている	15.4	6.0	8.2	5.6	5.4	10.8	16.7	25.0	22.1	32.5
まあ使っている	48.9	47.0	42.1	47.2	50.6	52.3	53.2	45.8	55.8	44.5
あまり使っていない	35.1	43.6	48.4	45.3	44.0	36.9	29.6	29.2	22.1	23.0
まったく使っていない	0.7	3.4	1.3	1.9	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0

*パソコンの所有に関する質問で「子ども専用のパソコンがある」「家族共通で使用しているパソコンがある」と回答した者のみが回答。

保護者の属性による傾向の違い

最後に、保護者の属性による傾向の違いを見てみよう。表4-2-11は父親・母親の学歴別に、「あなたの家には、お子様が使えるパソコンがありますか」に対してどのように回答したかを示している。ちなみに、「父親大卒」は、「お子様の父親が最後に卒業された学校はどれですか」の設問で「四年制大学」「大学院」を選択した者、「父親非大卒」は「中学校」「高校」「専門学校」「短大・高専」を選択した者を示す。また、「母親短大卒」は「お子様の母親が最後に卒業された学校はどれですか」の設問で「短大・高専」「四年制大学」「大学院」を選択した者、「母親非短大卒」は「中学校」「高校」「専門学校」を選択した者を示す。「父親大卒」の比率は全体の54.3%、「母親短大卒」の比率は52.7%で、どちらも全体のおよそ半数である。

表4-2-11から分かるように、「家にパソコンはない」のは、父母の学歴に関わらず1%未満である。しかし、「家にパソコンがあるが子どもは使わない」ケースが、「父親非大卒」「母親非短大卒」に多くなっている。

父親の学歴との関係を見てみると、「子ども専用のパソコンがある」と「家族共通で使用しているパソコンがある」の合計は、「父親大卒」で89.5%なのに対し、「父親非大卒」では85.0%と、5ポイント程度の開きがある。逆に、「家にパソコンはあるが子どもは使わない」のは、「父親非大卒」の方が5ポイント程度高くなっている（父親大卒9.9% < 父親非大卒14.7%）。

母親の学歴との関係でも、同様の傾向が見られる。「家にパソコンはあるが子どもは使わない」の割合は、「母親短大卒」が9.3%なのに対して、「母親非短大卒」では15.1%となっている。また、「家族共通で使用しているパソコンがある」の比率に、8ポイントほどの差が見られた（母親短大卒78.2% > 母親非短大卒70.6%）。

こうした結果から、保護者の学歴によって、子どもが利用できるパソコンの状況に差があることが分かる。

表4-2-11 パソコン所有状況（保護者学歴別）（%）

	父親 大卒	父親 非大卒	母親 短大卒	母親 非短大卒
子ども専用のパソコンがある	13.7	11.9	12.2	13.6
家族共通で使用しているパソコンがある	75.8	73.1	78.2	70.6
家にパソコンはあるが子どもは使わない	9.9	14.7	9.3	15.1
家にパソコンはない	0.6	0.4	0.3	0.7

* 「父親大卒」は父親の最終学歴に関する設問で「四年制大学」「大学院」と回答した者、「父親非大卒」は「中学校」「高校」「専門学校」「短大・高専」と回答した者を表わす。

* 「母親短大卒」は母親の最終学歴に関する設問で「短大・高専」「四年制大学」「大学院」と回答した者、「母親非短大卒」は「中学校」「高校」「専門学校」「短大・高専」と回答した者を表わす。

* 父親、母親の最終学歴に関する設問で「その他」「該当する人はいない」と回答した者は、分析から除外した。

3. 子どものICTメディア利用に対する保護者のはたらきかけ

本節では、子どもの携帯電話やパソコンの利用に対して、保護者がどのようなはたらきかけをしているのかを検討していくことにする。

(1) 携帯電話

携帯電話の利用に対するはたらきかけ

最初に、子どもの携帯電話利用に関して、保護者がどのように関与しているのかを見ていこう。

表4-3-1は、「あなたのご家庭では、お子様の携帯電話の使用に関して、次のようなことをしていますか」という質問に対する回答である。全体の傾向としてとくに多かったのは、「どのような使い方をしているのか把握するようにしている」(87.0%、「あてはまる」の数値、以下同様)と「公共の場でのマナーについて教えている」(83.2%)であった。ほかの項目も「携帯電話の危険性について話をする」が78.2%、「やりとりする相手や使用方法についてのルールを決めている」が65.2%、「使用する時間についてのルールを決めている」が59.8%となっており、多くの保護者がいろいろな点で子どもにはたらきかけていることが分かる。

表4-3-1 携帯電話の利用に対するはたらきかけ(全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
どのような使い方をしているか把握するようにしている	87.0	85.8	88.0
公共の場でのマナーについて教えている	83.2	83.3	83.2
携帯電話の危険性について話をする	78.2	76.0	80.1
やりとりをする相手や使用方法についてのルールを決めている	65.2	64.2	66.0
使用する時間についてのルールを決めている	59.8	60.2	59.5
携帯電話の料金をおこづかいから負担させている	18.8	22.0	16.2

*携帯電話の所持に関する質問で「自分専用の携帯電話をもっている」「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者のみが回答。

*数値は「あてはまる」の%。

学年によるはたらきかけの違い

次に、学年別に結果を示したのが、表4-3-2である。ただし、ここでは携帯電話の所有率の違いにより(表4-2-5参照)学年によって母数が異なっている点に留意が必要である。全体でも高い比率である「どのような使い方をしているのか把握するようにしている」「公共の場でのマナーについて教えている」の2項目は、学年ごとに多少の差はあるものの、ほぼどの学年でも「あてはまる」割合が高くなっている。

しかし、「使用する時間についてのルールを決めている」「やりとりする相手や使用方法につい

てのルールを決めている」については、学年が上がるにつれて、「あてはまる」の比率が低くなる。「使用時間」については、小1生の保護者のほぼ全員がルールを決めているのに対し、その後の学年では6～7割にとどまる。さらに中3生になると、ルールを決めているのは44.9%になり、決めていない保護者の方が多くなる。さらに、「やりとりする相手や使用方法」に関するルール決めは、小学生と中学生の差が著しい。小学生ではどの学年でも7割以上の保護者がルールを決めているのに対し、中学生になると、1年生62.5%、2年生56.3%、3年生48.6%と減少する。

このように、家庭内でルールを定める比率が学年とともに低下する理由として、次の二点が考えられる。第一に、学年とともに携帯電話の所持率が上昇するため、子どもに対する十分なケアができない家庭にまで子どもの利用が広がるという可能性である。第二に、子どもの発達による影響も想定できる。中学生段階になると、保護者が子どもの利用状況に十分に関与できない状況が生まれやすくなると推察される。同時に、成長によってルールを定めなくても自分の判断で適切に利用できるようになるとも考えられる。こうした子ども自身の発達も、ルールを定める比率の低下理由としてあげることができる。

一方、学年が上がるとともに増加するのは、「携帯電話の危険性について話をする」「携帯電話の料金をおこづかいから負担させている」の2項目である。例えば、「携帯電話の危険性について話をする」のは、小学校低学年では5割程度だが、小3生以上では8割前後になる。また、「携帯電話の料金をおこづかいから負担させている」保護者は、小学生では10%以下にとどまるものの、中1生で20.8%になり、中2生で23.2%、中3生で29.7%と増加する。

以上の結果からは、どの学年にも共通するはたらきかけがあるとともに、学年ごとに程度の異なるはたらきかけがあることが分かる。

表4-3-2 携帯電話の利用に対するはたらきかけ(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
どのような使い方をしているか把握するようにしている	95.0	87.0	88.2	94.7	88.9	89.5	84.4	91.1	80.4
公共の場でのマナーについて教えている	95.0	65.2	82.4	84.2	80.6	89.5	83.3	82.1	83.3
携帯電話の危険性について話をする	55.0	52.2	76.5	78.9	75.0	82.5	78.1	83.9	80.4
やりとりをする相手や使用方法についてのルールを決めている	95.0	73.9	82.4	81.6	80.6	87.7	62.5	56.3	48.6
使用する時間についてのルールを決めている	95.0	56.5	70.6	60.5	63.9	66.7	64.6	61.6	44.9
携帯電話の料金をおこづかいから負担させている	10.0	0.0	5.9	7.9	8.3	8.8	20.8	23.2	29.7

* 携帯電話の所持に関する質問で「自分専用の携帯電話をもっている」「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者のみが回答。

* 数値は「あてはまる」の%。

父親と母親の違い

最後に、保護者の属性による傾向を見てみよう。

表4-3-3は、父母別にはたらきかけの違いを示した結果である。これを見ると、全体として母親の方が熱心に関わっていることが分かる。唯一、「携帯電話の料金をおこづかいから負担させている」では、父親の方が母親よりも5.5ポイント高くなっているが、他の5つの項目では、父親よりも母親の方が、「あてはまる」と回答した割合が10ポイント前後高い。

表4-3-3 携帯電話の利用に対するはたらきかけ（父母別）（％）

	父親	母親
どのような使い方をしているか把握するようにしている	80.7	94.3
公共の場でのマナーについて教えている	77.6	89.8
携帯電話の危険性について話をする	71.4	86.2
やりとりをする相手や使用方法についてのルールを決めている	60.7	70.3
使用する時間についてのルールを決めている	56.6	63.8
携帯電話の料金をおこづかいから負担させている	21.4	15.9

*携帯電話の所持に関する質問で「自分専用の携帯電話をもっている」「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者のみが回答。

*数値は「あてはまる」の％。

(2) パソコン

パソコンの利用に対するはたらきかけ

それでは、子どものパソコン利用に対して、保護者はどのようなはたらきかけをしているのだろうか。表4-3-4は、「パソコンの使い方について、あなたとお子様とでは、どちらのほうが詳しいですか」とたずねた結果である。およそ9割の保護者が、子どもよりも自分の方が詳しい(「あなた」と「どちらかというあなた」の合計)と回答している。

さらに、表4-3-5は、「あなたのご家庭では、お子様のパソコンの使用に関して、次のようなことをしていますか」という質問に対して、「あてはまる」と回答した比率を示している。子どもに「パソコンの使い方を教える」は78.5%、「インターネットなどの危険性について話す」は64.4%にのぼる。さらに、「使用する内容や目的を決めている」61.8%、「使用する時間についてのルールを決めている」57.2%と、ルールの取り決めに関しても、多くの保護者が積極的なはたらきかけを行っていることが分かる。その一方で、「子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う」は42.0%、「有害情報を防ぐフィルタリングソフトを入れている」は36.7%と、半数を下回る。比較的熱心にパソコンを使っていると考えられる今回の対象者でも、近くに付き添ったり、フィルタリングソフトを用いたりして、つねに有害情報をチェックするまでにはいたっていないようだ。

ただし、前述のように、WEBアンケートという特性により、本調査の回答者は、ほぼ全員が家にパソコンを所有している。そのため、保護者のパソコンに対する詳しさや、ルール作りなどの働きかけについても、サンプルの影響が考えられることに留意する必要がある。

表4 - 3 - 4 パソコンの使い方に詳しい人（全体、父母別）（％）

	全体	父親	母親
あなた	75.7	89.1	59.9
どちらかというあなた	13.7	7.6	21.0
どちらともいえない	5.9	2.7	9.7
どちらかというお子様	3.4	0.5	6.7
お子様	1.3	0.1	2.6

*パソコンの所有に関する質問で「子ども専用のパソコンがある」「家族共通で使用しているパソコンがある」と回答した者のみが回答。

表4 - 3 - 5 パソコンの利用に対するはたらきかけ（全体、性別）（％）

	全体	男子	女子
パソコンの使い方を教える	78.5	79.3	77.6
インターネットなどの危険性について話をする	64.4	65.5	63.2
使用する内容や目的を決めている	61.8	61.9	61.7
使用する時間についてのルールを決めている	57.2	57.6	56.8
子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う	42.0	42.9	41.0
有害情報を防ぐフィルタリングソフトを入れている	36.7	37.8	35.5

*パソコンの所有に関する質問で「子ども専用のパソコンがある」「家族共通で使用しているパソコンがある」と回答した者のみが回答。

*数値は「あてはまる」の％。

学年によるはたらきかけの違い

続いて、学年別の傾向を確認しよう。表4-3-6は、パソコンの利用に関する働きかけについて学年別に示したものである。学年によって子どもが利用できるパソコンの所有率が異なるため(表4-2-9参照)、学年ごとに母数が異なる点には留意が必要であるが、どの項目でも、学年によって保護者のはたらきかけに差が見られる。

学年が上がるにつれてはたらきかけが減少するのは、「パソコンの使い方を教える」(小1生83.9%>中3生67.5%)、「あてはまる」の数値、以下同様)、「子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う」(68.5%>17.8%)、「使用する時間についてのルールを決めている」(69.1%>37.2%)、「使用する内容や目的を決めている」(73.8%>41.4%)の4項目である。とくに「子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う」という回答は、中学生になると大きく減少する。

これらの項目とは反対に「インターネットなどの危険性について話をする」は、学年が上がるとともに増加する(43.0%<79.6%)。使い方を教えたり、ルールを決めたりといったはたらきかけが減少する一方で、危険性について注意するようなはたらきかけが増加することがわかる。こうした傾向は、携帯電話の利用に対するはたらきかけ(表4-3-2)に類似している。

表4-3-6 パソコンの利用に対するはたらきかけ(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
パソコンの使い方を教える	83.9	86.2	82.6	86.3	79.0	84.4	71.9	68.9	67.5
インターネットなどの危険性について話をする	43.0	42.8	47.8	59.5	67.6	71.0	75.0	82.1	79.6
使用する内容や目的を決めている	73.8	73.6	75.8	71.4	62.5	56.5	54.2	55.3	41.4
使用する時間についてのルールを決めている	69.1	63.5	65.2	63.7	58.0	55.4	54.2	54.2	37.2
子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う	68.5	52.8	59.0	55.4	50.0	41.9	23.4	21.6	17.8
有害情報を防ぐフィルタリングソフトを入れている	28.2	34.6	35.4	35.1	40.9	37.6	34.4	41.6	40.3

*パソコンの所有に関する質問で「子ども専用のパソコンがある」「家族共通で使用しているパソコンがある」と回答した者のみが回答。

*数値は「あてはまる」の%。

父親と母親の違い

次に、保護者の属性による特徴を見てみよう。

先にとりあげた表4 - 3 - 4では、父母別の結果も示している。パソコンの使い方に詳しいのは「あなた」(= 保護者)と答えた比率を見ると、父親の方がかなり高くなっている(父親89.1% > 母親59.9%、「あなた」と「どちらかというあなた」の合計)。父親の方が母親よりも、パソコンに詳しいという自信があるようだ。

こうした傾向を反映してか、「パソコンの使い方を教える」比率も、父親が高くなっている。表4 - 3 - 7を見ると、「使い方を教える」としたのは、母親よりも父親の方が10ポイントほど高い(父親83.1% > 母親73.0%)。しかし、「子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う」「使用する時間についてのルールを決めている」「使用する内容や目的を決めている」「インターネットなどの危険性について話をする」といった項目では、母親の方が高くなっている。

以上から、実際の使い方を指導するのは父親に多く、利用に関してのルールを決めたり、利用の際に付き添ったりするのは母親に多いという傾向を読み取ることができる。

表4 - 3 - 7 パソコン利用に関する取り組み(全体、父母別) (%)

	全体	父親	母親
パソコンの使い方を教える	78.5	83.1	73.0
インターネットなどの危険性について話をする	64.4	58.1	71.7
使用する内容や目的を決めている	61.8	53.2	72.0
使用する時間についてのルールを決めている	57.2	51.8	63.5
子どもが使うときはできるだけ近くに付き添う	42.0	35.9	49.2
有害情報を防ぐフィルタリングソフトを入れている	36.7	35.2	38.6

*パソコンの所有に関する質問で「子ども専用のパソコンがある」「家族共通で使用しているパソコンがある」と回答した者のみが回答。
*数値は「あてはまる」の%。

4. ICTメディアの利用に対するメリットとデメリットの認識

子どもが携帯電話やパソコンを利用することのメリット/デメリットについて、保護者はどのように認識しているのだろうか。本節では、第一にクロス表分析によって、誰がどのようなメリット/デメリットを感じているのか分析する。第二に、自由記述を概観し、保護者の具体的な声を通して、メリット/デメリットの内容を検討する。

(1) 携帯電話

メリットやデメリットに対する認識

まず、子どもが携帯電話を利用することについて、保護者がメリット/デメリットを感じているかどうか確認しよう。表4-4-1は、「総合的に考えて、子どもが携帯電話を使うことは、メリットとデメリットのどちらが大きいと思いますか」という質問に対する回答結果を、全体、性別に示したものである。最初に全体の傾向を見ると、「メリットが大きい」(「メリットが大きい」と「どちらかというともメリットが大きい」の合計)が50.6%、「デメリットが大きい」(「デメリットが大きい」と「どちらかというともデメリットが大きい」の合計)が49.4%となっており、保護者の認識がほぼ二分されていることが分かる。

それでは、どのような点にメリット/デメリットを感じているのだろうか。「子どもが携帯電話を使うことについて、あなたはどのように思いますか」という質問に対する回答を、表4-4-2で見よう。この質問では、「親子で連絡をとるのに便利である」「危険から身を守るのに役立つ」「友だちとの関係作りに役立つ」「その場ですぐに必要な情報が入手できる」「親子の関係づくりに役立つ」「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」の6項目をメリットの要素、「有害情報に接するのが心配である」「犯罪に巻き込まれないか心配である」「子どもの友人関係が見えにくくなる」「生活が乱れる」の4項目をデメリットの要素として設定している。

メリットとして圧倒的に支持されているのは、「親子で連絡をとるのに便利である」(90.2%、「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以下同様)で、9割を超える。保護者へのアンケートであるために、この項目がとくに支持されたのであろう。ほかには、「危険から身を守るのに役立つ」(68.8%)、「友だちとの関係づくりに役立つ」(53.6%)も比較的 support されている。逆に、「親子の関係づくりに役立つ」(24.6%)、「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」(22.6%)などの項目は、「そう思う」と回答した保護者が比較的少ない。

次に、デメリットはどのように意識されているだろうか。とくに多かったのは「有害情報に接するのが心配である」で、「そう思う」とした保護者は78.1%にのぼる。ほかにも「犯罪に巻き込まれないか心配である」(64.7%)、「子どもの友人関係が見えにくくなる」(61.9%)の2項目は6割を超え、多くの保護者が懸念している様子がうかがえる。

表4 - 4 - 1 携帯電話のメリット/デメリット(全体、性別)(%)

	全体	男子	女子
メリットが大きい	4.2	4.7	3.6
どちらかというともメリットが大きい	46.4	45.2	47.9
どちらかというともデメリットが大きい	40.1	41.1	39.0
デメリットが大きい	9.3	9.1	9.5

表4 - 4 - 2 携帯電話の利用に対する考え(全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
親子で連絡をとるのに便利である	90.2	89.0	91.6
危険から身を守るのに役に立つ	68.8	68.0	69.4
友だちとの関係づくりに役に立つ	53.6	53.0	54.3
その場ですぐに必要な情報が入手できる	39.7	40.2	38.9
親子の関係づくりに役に立つ	24.6	23.8	25.4
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	22.6	23.4	21.7
有害情報に接するのが心配である	78.1	79.3	76.8
犯罪に巻き込まれないか心配である	64.7	63.8	65.7
子どもの友人関係が見えにくくなる	61.9	61.4	62.3
生活が乱れる	51.1	51.4	50.8

*数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)

学年ごとの特徴

それでは、携帯電話の利用に関する保護者の認識は、子どもの学年によって異なるのだろうか。表4-4-3に示されているように、子どもが小学生の段階では、「メリットが大きい」(「メリットが大きい」と「どちらかというともメリットが大きい」の合計)という回答は5割を下回る。しかし、中学生になると5割を超え、中3生では73.0%と大幅に増加している。中学生の段階になると、さまざまな場面でメリットを感じる機会が増えるのかもしれない。

それでは、具体的にどのような点にメリットを感じるようになるのだろうか。携帯電話の利用に対する考えを学年別に示したのが、表4-4-4である。

学年が上がるとともに「そう思う」(「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計)の比率が増加するのは、「友だちとの関係づくりに役に立つ」(小1生44.5%<中3生74.5%、以下同様)「その場ですぐに必要な情報が入手できる」(35.0%<57.5%)「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」(14.5%<34.5%)の3項目である。「親子の関係づくり」に比べると「友だちとの関係づくり」において、メリットを強く感じるようになるようである。さらに、情報収集の利便性や気分転換といった娯楽性など、携帯電話のもつ多様な機能も、子どもの学年が上がるとともに強く意識されるようになる。

一方、学年が上がるとともに「そう思う」の比率が低下するのは「危険から身を守るのに役に立つ」(82.0%>64.5%)という項目である。安全性に対する認識は、子どもが低学年ほど高いことがわかる。このような学年による変化は、子どもの発達と大きくかかわっているものと考えられる。

続いて、デメリットに対する意識について、子どもの学年による違いがあるのかを確認しよう。表からも分かるように、メリットに比べるとデメリットに対する意識は学年ごとの変化が小さい。「有害情報に接するのが心配である」は学年を問わず8割前後、「犯罪に巻き込まれないか心配である」は6割台、「子どもの友人関係が見えにくくなる」は6割前後で推移する。「生活が乱れる」に関しては、中3生が33.0%と低いが、他の学年は5割前後である。

以上より、携帯電話の利用に関しては、学年が進むにつれて(とくに中学生になると)メリットが強く認識される傾向にあるようだ。特定の項目ではさらにそうした傾向が顕著であった。一方でデメリットとなる要素に関しては、子どもの成長にかかわらず共通して認識されている項目が多いことが分かる。

表4 - 4 - 3 携帯電話のメリット/デメリット(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
メリットが大きい	4.5	3.5	1.5	4.5	4.0	4.0	4.5	4.5	6.5
どちらかというともメリットが大きい	45.0	41.5	43.5	38.0	40.5	44.0	51.5	47.5	66.5
どちらかというともデメリットが大きい	42.5	44.5	45.0	44.5	44.0	42.5	35.0	40.0	23.0
デメリットが大きい	8.0	10.5	10.0	13.0	11.5	9.5	9.0	8.0	4.0

表4 - 4 - 4 携帯電話の利用に対する考え(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
親子で連絡をとるのに便利である	90.0	90.0	88.0	87.5	86.0	91.5	93.5	90.5	95.0
危険から身を守るのに役に立つ	82.0	74.0	73.5	66.0	64.0	70.5	63.5	60.5	64.5
友だちとの関係づくりに役に立つ	44.5	44.5	42.5	39.5	47.0	55.5	65.0	69.5	74.5
その場ですぐに必要な情報が入手できる	35.0	31.5	35.5	38.0	42.5	37.5	34.5	45.0	57.5
親子の関係づくりに役に立つ	25.5	25.0	23.5	17.5	16.5	25.0	28.0	25.0	35.0
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	14.5	19.0	17.0	16.0	25.5	18.5	27.5	31.0	34.5
有害情報に接するのが心配である	77.0	79.5	78.5	76.5	77.5	83.5	77.5	78.5	74.5
犯罪に巻き込まれないか心配である	69.0	61.0	69.5	62.0	63.5	67.5	61.0	68.0	60.5
子どもの友人関係が見えにくくなる	63.0	67.5	63.0	63.0	58.0	66.0	57.5	62.0	56.5
生活が乱れる	58.5	57.0	53.0	50.5	52.0	57.0	47.5	51.5	33.0

*数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)

父親と母親の違い

続いて、保護者の属性による違いを見てみよう。

表4 - 4 - 5では、「総合的に考えて、子どもが携帯電話を使うことは、メリットとデメリットのどちらが大きい」と思うかたずねた結果を父母別に示している。「メリットが大きい」「どちらかというともメリットが大きい」を合わせた数値は、父親が53.1%、母親が47.7%となっている。母親よりも父親の方が、子どもが携帯電話を利用することのメリットが大きいと認識する傾向にあるようだ。

では、具体的な項目ではどのような違いが見られるだろうか。「子どもが携帯電話を使うことについて、あなたはどのように思いますか」という項目について父母別に示したのが、表4 - 4 - 6である。「そう思う」「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計)の比率を見ていくと、母親の方が「親子の関係づくりに役に立つ」(母親29.2% > 父親20.8%、以下同様)、「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」(25.4% > 20.4%)に関して高く評価している。

その一方で、「子どもの友人関係が見えにくくなる」(68.8% > 56.2%)、「有害情報に接するのが心配である」(84.2% > 73.2%)、「犯罪に巻き込まれないか心配である」(73.5% > 57.5%)、「生活が乱れる」(55.9% > 47.2%)といったデメリットに関する項目についても、母親の方が「そう思う」割合が高い。母親は、子どもが携帯電話を使うことに対して、高い不安感を抱いている様子が見て取れる。

このように、全体としては父親の方がメリットを高く評価している。これに対して母親は、メリットについて部分的に認識しているものの、デメリットがあることも強く感じているようだ。

表4 - 4 - 5 携帯電話のメリット/デメリット(全体、父母別)(%)

	全体	父親	母親
メリットが大きい	4.2	5.0	3.1
どちらかというともメリットが大きい	46.4	48.1	44.6
どちらかというともデメリットが大きい	40.1	36.7	44.2
デメリットが大きい	9.3	10.3	8.1

表4 - 4 - 6 携帯電話利用についての考え(全体、父母別)(%)

	全体	父親	母親
親子で連絡をとるのに便利である	90.2	88.4	92.5
危険から身を守るのに役に立つ	68.8	65.6	72.4
友だちとの関係づくりに役に立つ	53.6	52.5	55.0
その場ですぐに必要な情報が入手できる	39.7	39.7	39.8
親子の関係づくりに役に立つ	24.6	20.8	29.2
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	22.6	20.4	25.4
有害情報に接するのが心配である	78.1	73.2	84.2
犯罪に巻き込まれないか心配である	64.7	57.5	73.5
子どもの友人関係が見えにくくなる	61.9	56.2	68.8
生活が乱れる	51.1	47.2	55.9

*数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)

携帯電話の所持/非所持による違い

メリット/デメリットに関する意識は、子どもの携帯電話の利用状況によって異なると考えられる。そこで、最後に携帯電話の所持/非所持によって、保護者の意識に違いがあるかどうか、検討しよう。

表4-4-7は、子ども携帯電話の所持/非所持によって、保護者の意識にどのような違いがあるか、分析したものである。ここでの分析は、子どもの学年ごとの携帯電話所持率が影響を及ぼす可能性があるため、学年で統制している。「あなたのお子様は、携帯電話をえていますか」という質問に対する回答のうち、「自分専用の携帯電話をえている」と「家族やきょうだいで共有の携帯電話をえている」を、子どもが利用できる携帯電話があるということとまとめて「所持」、「携帯電話はっていない」を「非所持」とした。また、メリット/デメリットに対する総合的な判断については、「メリットが大きい」と「どちらかというともメリットが大きい」を合わせて「メリットが大きい」、「どちらかというともデメリットが大きい」と「デメリットが大きい」を合わせて「デメリットが大きい」としてまとめた。

表を見ると、まず全体として、「子どもが携帯電話をえている」保護者の方が、子どもによる携帯電話の利用に関して、「メリットが大きい」と判断する傾向にある。子どもが携帯電話をえている場合（以下では、「所持」と略記）は80.6%が「メリットが大きい」と判断しているのに対して、子どもがっていない場合（以下では、「非所持」と略記）では37.8%にとどまる。

表4-4-7 携帯電話のメリット/デメリット（学年別・携帯電話所持別）（%）

メリットが大きい

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
所持	80.6	85.0	95.7	94.1	97.4	80.6	82.5	76.0	70.5	81.9
非所持	37.8	45.6	38.4	40.4	29.6	36.6	34.3	37.5	28.4	53.2

デメリットが大きい

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
所持	19.4	15.0	4.3	5.9	2.6	19.4	17.5	24.0	29.5	18.1
非所持	62.2	54.4	61.6	59.6	70.4	63.4	65.7	62.5	71.6	46.8

* 「所持」は「自分専用の携帯電話をえている」と「家族やきょうだいで共有の携帯電話をえている」と回答した者、「非所持」は「携帯電話はっていない」と回答した者を示す。

* 「メリットが大きい」は、「メリットが大きい」と「どちらかというともメリットが大きい」の合計、「デメリットが大きい」は、「デメリットが大きい」と「どちらかというともデメリットが大きい」の合計（%）

次に、表4 - 4 - 8をもとに、具体的な項目について見てみよう。全体の傾向を見ると、「所持」の方が「そう思う」(「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以下同様)の比率が高い項目は、「親子で連絡をとるのに便利である」(所持 96.3% > 非所持 87.6%、以下同様)、「親子の関係づくりに役に立つ」(36.9% > 19.3%)、「友だちとの関係づくりに役に立つ」(65.2% > 48.7%)、「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」(27.7% > 20.4%)の4つである。これらはすべて、メリットと考えられる項目である。

では、学年で統制するとどのような結果が見られるだろうか。まず、親子間でのメリットを高く評価するのは、「所持」に多い。「親子で連絡をとるのに便利である」では、どの学年でも「所持」の9割以上が「そう思う」としている。「親子の関係づくりに役に立つ」でも、「そう思う」と答える割合には学年によって差はあるが、「非所持」より「所持」に多いという傾向は、どの学年でも共通している。子どもに携帯電話をもたせている保護者は、こうしたメリットを実感する場面が多い様子がうかがえる。

一方、「友だちとの関係づくりに役に立つ」は、学年によって変化する。小4生までは「所持」よりも「非所持」の方が、「そう思う」とする割合が多くなっている。しかし、小5生で「所持」の方が「そう思う」とする割合が多くなり(58.3% > 44.5%)、小6生以降でも同様の傾向が見られる。これはおそらく、学年ごとの携帯電話所有率の差も影響しているだろう。つまり、周囲に携帯電話の所持者の少ない小学校低学年では、友だちと連絡をとることも少ないため「友だちとの関係づくり」においてメリットを感じにくい。小学校高学年や中学生では、周りに携帯の所持が増え、友だちと通話やメールをする機会が多くなることが考えられる。

ここまでではメリットの要素となる項目について検討してきたが、逆にデメリットとなる項目に関しては、「非所持」の方が「そう思う」比率が高くなる。「子どもの友人関係が見えにくくなる」(47.5% < 67.9%)、「有害情報に接するのが心配である」(69.8% < 81.6%)、「犯罪に巻き込まれないか心配である」(53.8% < 69.3%)、「生活が乱れる」(30.7% < 59.8%)のいずれの項目でも、「非所持」の比率が高い。学年で統制しても、4項目すべての学年で同じ傾向が見られる。携帯電話に対する評価と、所持/非所持の間には、関連があると言える。

以上、子どもが携帯電話をもっているかどうかによって、親の意識がどのように異なるかを見てきた。全体的に、子どもに携帯電話をもたせている保護者の方が「メリットが大きい」と感じ、もたせていない保護者の方が「デメリットが大きい」と感じている傾向にあることが分かった。

表 4 - 4 - 8 携帯電話の利用に対する考え（学年別・携帯電話所持別）（％）

	全体		小1		小2		小3		小4	
	所持	非所持	所持	非所持	所持	非所持	所持	非所持	所持	非所持
親子で連絡をとるのに便利である	96.3	> 87.6	100.0	88.9	95.7	> 89.3	94.1	> 87.4	100.0	84.6
危険から身を守るのに役に立つ	69.3	68.5	90.0	> 81.1	73.9	74.0	88.2	72.1	76.3	63.6
友だちとの関係づくりに役に立つ	65.2	48.7	35.0	45.6	21.7	47.5	23.5	44.3	23.7	43.2
その場ですぐに必要な情報が入手できる	41.5	38.9	45.0	33.9	17.4	33.3	11.8	37.7	31.6	< 39.5
親子の関係づくりに役に立つ	36.9	19.3	45.0	23.3	39.1	23.2	47.1	21.3	28.9	14.8
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	27.7	> 20.4	15.0	14.4	17.4	19.2	11.8	< 17.5	10.5	< 17.3
有害情報に接するのが心配である	69.8	81.6	70.0	< 77.8	52.2	83.1	41.2	82.0	68.4	78.4
犯罪に巻き込まれないか心配である	53.8	69.3	45.0	71.7	34.8	64.4	29.4	73.2	52.6	64.2
子どもの友人関係が見えにくくなる	47.5	67.9	50.0	64.4	26.1	72.9	23.5	66.7	36.8	69.1
生活が乱れる	30.7	59.8	30.0	61.7	13.0	62.7	5.9	57.4	15.8	58.6

	小5		小6		中1		中2		中3	
	所持	非所持	所持	非所持	所持	非所持	所持	非所持	所持	非所持
親子で連絡をとるのに便利である	94.4	84.1	96.5	> 89.5	94.8	92.3	95.5	84.1	97.1	> 90.3
危険から身を守るのに役に立つ	69.4	> 62.8	75.4	> 68.5	62.5	64.4	66.1	> 53.4	65.9	61.3
友だちとの関係づくりに役に立つ	58.3	44.5	56.1	55.2	77.1	53.8	76.8	60.2	81.2	59.7
その場ですぐに必要な情報が入手できる	38.9	43.3	42.1	> 35.7	39.6	> 29.8	41.1	< 50.0	53.6	66.1
親子の関係づくりに役に立つ	27.8	14.0	42.1	18.2	39.6	17.3	30.4	18.2	39.9	24.2
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	22.2	26.2	21.1	17.5	30.2	> 25.0	36.6	23.9	33.3	37.1
有害情報に接するのが心配である	66.7	79.9	71.9	88.1	71.9	82.7	72.3	86.4	73.2	77.4
犯罪に巻き込まれないか心配である	44.4	67.7	56.1	72.0	52.1	69.2	60.7	77.3	58.7	< 64.5
子どもの友人関係が見えにくくなる	38.9	62.2	47.4	73.4	49.0	65.4	54.5	71.6	52.2	66.1
生活が乱れる	30.6	56.7	28.1	68.5	39.6	54.8	37.5	69.3	30.4	< 38.7

* 「所持」は「自分専用の携帯電話をもっている」と「家族やきょうだいで共有の携帯電話をもっている」と回答した者、「非所持」は「携帯電話をもっていない」と回答した者を示す。

* 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計（％）

* 「所持」と「非所持」の間で5ポイント以上の差があるものには<>、10ポイント以上の差があるものには を付してある。

自由記述

ここでは、「あなたは、お子様に携帯電話をもたせていてよかったと感じることがありますか」とたずねた質問、および、「お子様に携帯電話をもたせていて困ったことや失敗したと感じることがありますか」とたずねた質問に対する自由記述の回答を分析する。保護者が感じる、子どもの携帯電話利用のメリット/デメリットの具体的な例を見ていこう。なお、()内には回答者の子どもの学年・性別・子どもとの続柄を記入している。また、記述は、明らかな誤字脱字を除き、原文どおりとした。

1) 保護者が感じる携帯電話のメリット

最初に、「メリット」について見ていこう。もっとも多かった回答は、「連絡のとりやすさ」を強調する声である。具体的な場面としては、緊急時や、塾や習い事の送迎時に利用するという声が目立った。例えば、以下のような記述である。

- ・連絡が取りやすい(中1生・女子・父親)
- ・緊急の時に連絡ができる(小1生・男子・父親)
- ・急用が出来た時に連絡がとれるようになった(小6生・女子・母親)
- ・すぐに連絡が取れて便利です(中3生・女子・母親)
- ・いつでも連絡が取れること(中3生・男子・母親)
- ・外出時に連絡が取れる(中2生・女子・父親)
- ・塾に通っているが、帰りの時間がまちまちで、お迎えに行くタイミングがつかめなかったり、駅で長い時間待つことになったりしていた。しかし携帯電話を持たせてからは、塾を出るときに電話をさせるので、それがなくなって良かった(小4生・女子・母親)

また、「連絡のとりやすさ」とも関連するが、「所在が分かる」という声も多かった。GPSについての言及もいくつか見られた。

- ・居場所が分かる(小4生・女子・父親)
- ・どこにいるか把握できる(中2生・男子・父親)
- ・両親共に働いており、子供1人で行動する事が多いので、学校から帰ってきたとき、遊びに出かける時、習い事に行く時など、必ず親の携帯に電話をかけさせる事にしているので所在確認ができるので安心できる(小2生・男子・母親)
- ・GPS付きなので居場所が検索出来るので、何も無いよりは少し安心できる(小4生・男子・父親)

他には、少数派ではあるが、親や友人との「コミュニケーション」を評価する声もあった。また、公衆電話が少ない「現代においての必要性」を指摘する声もあった。

- ・修学旅行に行ったときに写メールを送ってくれてうれしかった(中3生・男子・父親)
- ・不登校で親にも話もしないが、メールで意思表示をするようになって来た(中3生・男子・父親)
- ・会話では、話さないような時でもメールで会話している。本人も直接話せないようお願い事とかをメールでよこす(中1生・女子・父親)
- ・学校でいじめられていたが、携帯を持つようになったら、友達とメールするようになったら、明るくなったようで、笑顔が増えた(中2生・男子・母親)
- ・公衆電話が少なくなり必要性を感じる(小6生・女子・父親)

2)保護者が感じる携帯電話のデメリット

続いて、「デメリット」を見てみよう。多かったのは「料金が高い」「使いすぎ」を指摘する声である。「使いすぎ」については、メールがとくに多く、ダウンロード、パケットなどをあげる保護者もいた。

- ・料金の負担(小6生・男子・母親)
- ・有料サイトに登録して請求がたくさん来てしまうこと(中1生・女子・母親)
- ・web にアクセスして、着メロなどにお金がかかり、携帯代が月に2万円近く(子供の携帯1台分)になったことがあること(小4生・女子・母親)
- ・携帯でのネット閲覧で4万円の使用料請求(中3生・男子・父親)
- ・着メロや壁紙をたくさんダウンロードしてること(中2生・男子・その他)
- ・使いすぎる(中2生・女子・父親 ほか)
- ・友達とのメールが多すぎる(中2生・女子・父親)
- ・常にそばにおいてある為、依存症になっている(中3生・男子・母親)
- ・携帯に依存しているように思う(中3生・男子・母親)

「使いすぎ」から生じた結果なのか、「勉強に集中しない」などの声もあった。

- ・勉強に集中できない(中3生・女子・父親)
- ・試験勉強がおろそかになることがあった(中3生・男子・母親)

その他には、「破損」「携帯を忘れる」「交友関係が分からない」といった声も散見された。

- ・連絡がつくはずなのに、どうしたのかと思ったら子どもが携帯を家に忘れて出かけていた(小4生・男子・母親)
- ・落として破損させる(小4生・男子・母親)

- ・夜遅い時間にメールのやり取りをして夜更かしすることが増え、メールのやり取りが主な親の知らない友達が増えた(中2生・女子・母親)
- ・交友関係が把握しづらくなった事(小6生・女子・母親)

以上、自由記述では、子どもの携帯電話利用のメリットとして「連絡のとりやすさ」「所在が分かる」「コミュニケーション」などが、デメリットとして「料金が高い」「使いすぎ」「勉強に集中しない」「破損」「携帯を忘れる」「交友関係がわからない」などがあげられていた。

(2) パソコン

メリットやデメリットに対する認識

続けて、子どもがパソコンを利用することについて、保護者がメリット/デメリットを感じているかどうかを確認しよう。表4-4-9は、「総合的に考えて、子どもがパソコンやインターネットを使うことは、メリットとデメリットのどちらが大きいと思いますか」とたずねた結果である。ここでは、「メリットが大きい」「どちらかというともメリットが大きい」とした保護者が合わせて80.4%にのぼり、携帯電話の場合と比較しても、メリットを強く意識していることがうかがえる。ただし、本調査はWEBアンケートであり、パソコンのメリットを意識しやすい保護者が多く含まれるサンプルになっている可能性は考えられる。

それでは、どのような点にメリット/デメリットを感じているのか、もう少し具体的に見ていこう。表4-4-10は、「子どもがパソコンを使うことについて、あなたはどのように思いますか」とたずねた結果である。ここでは「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせた数値を表示している。「情報収集や情報活用の力が身につく」「学習に役に立つ」「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」「コミュニケーションや情報発信の力が身につく」「友だちとの関係づくりに役立つ」「親子の関係づくりに役立つ」の6項目をメリットの要素、「有害情報に接するのが心配である」「犯罪に巻き込まれないか心配である」「生活が乱れる」の3項目をデメリットの要素として設定している。

メリットとして強く感じられているのは、「情報収集や活用の力が身につく」(89.0%)、「学習に役に立つ」(87.5%)の2項目である。携帯電話では肯定率が低かった「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」も、パソコンでは比較的高くなっている(携帯電話22.6%<パソコン47.8%)。反対に、携帯電話で高かった「友だちとの関係づくりに役に立つ」は、パソコンでは「親子の関係づくりに役立つ」(23.9%)と並んで低くなっている(携帯53.6%>パソコン29.1%)。子どもの人間関係づくりを援助するツールとしてのとらえる意識は、パソコンの場合あまり強くはないようだ。

デメリットとなる要素に関しては、「有害情報に接するのが心配である」が79.3%、「犯罪に巻き込まれないか心配である」が56.6%、「生活が乱れる」が40.3%となっている。これらは携帯電話の場合と同程度か、わずかに低い(携帯電話:順に78.1%、64.7%、51.1%)。デメリットとなる要素への懸念に関しては、パソコンよりも携帯電話に大きいようである。

表4 - 4 - 9 パソコンのメリット/デメリット(全体、性別)(%)

	全体	男子	女子
メリットが大きい	11.5	11.3	11.7
どちらかというともメリットが大きい	68.9	67.4	70.7
どちらかというともデメリットが大きい	17.3	18.9	15.5
デメリットが大きい	2.2	2.3	2.1

表4 - 4 - 10 パソコンの利用に対する考え(全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
情報収集や情報活用の力が身につく	89.0	89.1	88.8
学習に役に立つ	87.5	86.7	88.5
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	47.8	48.1	47.4
コミュニケーションや情報発信の力が身につく	41.1	40.1	42.4
友だちとの関係づくりに役に立つ	29.1	28.7	29.7
親子の関係づくりに役立つ	23.9	24.5	23.2
有害情報に接するのが心配である	79.3	81.7	76.6
犯罪に巻き込まれないか心配である	56.6	58.8	54.2
生活が乱れる	40.3	42.1	38.2

*数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)

学年ごとの特徴

それでは、子どもの学年によって、保護者の意識は異なるのだろうか。表4 - 4 - 11 では、総合的に見たときのメリット/デメリットについて、保護者にたずねた結果である。全体でも、子どものパソコン利用について「メリットが大きい」(「メリットが大きい」と「どちらかというメリットが大きい」の合計)とする比率が高かったが、なかでも、小6生~中学生では85%前後が「メリットが大きい」と回答している。相対的に見て、子どもの学年が高い保護者の方が、パソコンのメリットを感じているようである。

続いて、表4 - 4 - 12 で、具体的な項目ごとに学年別の傾向を確認しよう。メリットとして設定した項目については、学年が上がるにつれて「そう思う」(「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計)と回答する割合が増加する傾向にある。とくに、小学校高学年や中学生の段階で比率が高まる項目が多い。例えば、「学習に役に立つ」(小1生 83.5% < 中3生 91.5%、
「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以下同様)、「情報収集や情報活用の力が身につく」(80.5% < 97.5%)、「コミュニケーションや情報発信の力が身につく」(36.5% < 55.0%)、「友だちとの関係づくりに役に立つ」(19.5% < 44.0%)、「音楽やゲームなど気分転換に役立つ」(39.5% < 65.0%) など項目では、顕著にその傾向が見られた。

一方で、デメリットとなる要素については、メリットとなる要素ほど学年との関連が見られない。ただし、「犯罪に巻き込まれないか心配である」(全体 56.6% > 中3生 48.0%)、「生活が乱れる」(全体 40.3% > 中3生 32.0%) の2項目では、中3生が他の学年よりも比率が低かった。

以上より、携帯電話と同様、パソコンの利用に関しても、とくに中学生になるとメリットが強く認識される傾向にあることが分かった。特定の項目ではさらにそうした傾向が顕著であった。

表4 - 4 - 11 パソコンのメリット/デメリット(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
メリットが大きい	7.0	10.5	10.5	8.5	10.5	12.0	17.5	7.5	19.5
どちらかというともメリットが大きい	70.5	60.0	67.5	67.5	66.5	72.5	68.5	78.0	69.5
どちらかというともデメリットが大きい	19.0	28.0	19.5	19.5	20.5	14.0	12.5	12.5	10.5
デメリットが大きい	3.5	1.5	2.5	4.5	2.5	1.5	1.5	2.0	0.5

表4 - 4 - 12 パソコンの利用に対する考え(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
情報収集や情報活用の力が身につく	80.5	78.0	87.0	88.0	93.0	92.5	91.5	92.5	97.5
学習に役に立つ	83.5	86.5	86.5	83.0	89.0	92.0	89.5	86.0	91.5
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	39.5	43.5	44.0	41.0	43.5	48.0	51.5	54.0	65.0
コミュニケーションや情報発信の力が身につく	36.5	36.5	34.5	34.5	34.5	44.0	42.5	52.0	55.0
友だちとの関係づくりに役に立つ	19.5	21.5	24.5	22.5	24.0	31.0	34.0	41.5	44.0
親子の関係づくりに役に立つ	21.0	21.5	28.0	20.5	16.5	30.5	24.5	25.0	28.0
有害情報に接するのが心配である	74.5	80.5	78.0	80.5	82.5	82.5	75.0	82.5	77.5
犯罪に巻き込まれないか心配である	59.0	57.5	56.5	57.0	57.5	59.0	55.5	60.0	48.0
生活が乱れる	43.5	46.5	39.0	43.5	40.0	43.0	34.5	40.5	32.0

*数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)

父親と母親の違い

続いて、保護者の属性ごとの傾向を見てみよう。

表 4 - 4 - 13 は、「総合的に考えて、子どもがパソコンやインターネットを使うことは、メリットとデメリットのどちらが大きいと思いますか」とたずねた結果を父母別に示している。携帯電話と同様に、ここでも父親の方が「メリットが大きい」とする傾向にあるようだ。具体的には、「メリットが大きい」と「どちらかというともメリットが大きい」を合わせると、父親は 83.6%なのに対して母親は 76.6%と、7ポイントの開きがある。

それでは、具体的な項目について、父親と母親で違いは見られるのだろうか。「子どもがパソコンを使うことについて、あなたはどのように思いますか」とたずねた結果(表 4 - 4 - 14)を、父母別に見てみよう。表からも分かるように、子どもがパソコンを使うことのメリットについては、父母間でそれほど大きな意見の差がない。差が目立ったのは、デメリットに対する意識である。例えば、「犯罪に巻き込まれないか心配である」では、父親 50.8%に対し母親は 63.8%と、13ポイントもの開きがある。また、「生活が乱れる」でもおよそ7ポイントの開きが見られた(父親 37.1% < 母親 44.2%)。

前述したように、母親は子どもが携帯電話を利用することについての不安感が高かったが、パソコンの利用に対しても同様の意識が強いことが表れている。

表4 - 4 - 13 パソコンのメリット/デメリット(全体、父母別)(%)

	全体	父親	母親
メリットが大きい	11.5	14.2	8.2
どちらかというともメリットが大きい	68.9	69.4	68.4
どちらかというともデメリットが大きい	17.3	14.7	20.4
デメリットが大きい	2.2	1.6	2.9

表4 - 4 - 14 パソコン利用についての考え(全体、父母別)(%)

	全体	父親	母親
情報収集や情報活用の力が身につく	89.0	89.3	88.6
学習に役に立つ	87.5	88.0	87.0
音楽やゲームなど気分転換に役に立つ	47.4	45.6	50.4
コミュニケーションや情報発信の力が身につく	41.1	41.4	40.7
友だちとの関係づくりに役に立つ	29.1	30.2	28.0
親子の関係づくりに役に立つ	23.9	24.5	23.3
有害情報に接するのが心配である	79.3	77.6	81.3
犯罪に巻き込まれないか心配である	56.6	50.8	63.8
生活が乱れる	40.3	37.1	44.2

*数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)。

パソコンの利用状況による違い

最後に、子どものパソコンの利用状況によって、保護者の意識がどのように異なるかを分析しよう。メリット/デメリットに関する意識は、子どもがどれくらいパソコンを利用しているかに影響されるものと推察される。ここでは、下の図4 - 4 - 1で示したように、子どもが家でパソコンを「使っている」と回答した者を「頻度高」群、「使わない/使わせない」「家がない」や「使っていない」と回答した者を「頻度低」群として、両群の違いを検討した。

図4 - 4 - 1 パソコンの利用状況

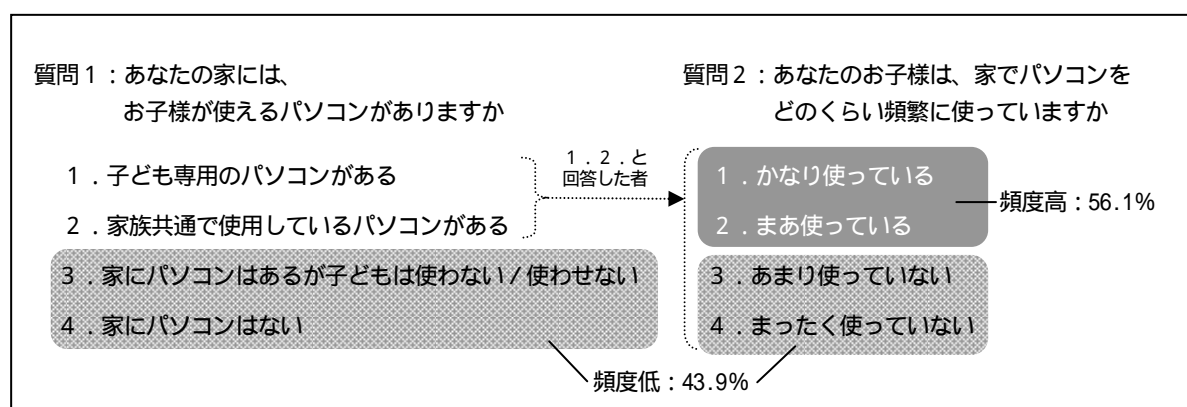


表4 - 4 - 15 は、子どものパソコン利用頻度によって、親の意識にどのような違いがあるか、分析したものである。ここでの分析は、学年ごとの利用状況の違いが影響を及ぼす可能性があるため、学年を統制している。表を見ると、「メリットが大きい」という回答は、利用頻度が高い子どもの保護者（以下では「頻度高」と略記）では88.3%、利用頻度が低い子どもの保護者（以下では「頻度低」と略記）では70.4%となっており、17.9ポイントの差がある。子どもがパソコンをよく使っていると、保護者もメリットを実感しやすいようだ。

学年を統制して見た場合でも、学年によっては「頻度高」と「頻度低」の差が小さくなるケースもあるが、子どもの利用頻度が高いと保護者がメリットを強く感じる傾向には変わりがない。

表4 - 4 - 15 パソコンのメリット/デメリット(学年別・パソコン利用頻度別)(%)

メリットが大きい

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
頻度高	88.3	89.9	90.0	91.8	83.0	84.7	89.2	87.5	88.5	90.5
頻度低	70.4	69.4	57.5	67.8	69.8	67.4	75.7	82.8	76.9	84.9

デメリットが大きい

	全体	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
頻度高	11.7	10.1	10.0	8.2	17.0	15.3	10.8	12.5	11.5	9.5
頻度低	29.6	30.6	42.5	32.2	30.2	32.6	24.3	17.2	23.1	15.1

* 「頻度高」は子どもが使えるパソコンがある者のうち「かなり使っている」「まあ使っている」と回答した者、「頻度低」は子どもが使えるパソコンはあるが「あまり使っていない」「まったく使っていない」と回答した者、および「パソコンはあるが子どもは使わない/使わせない」「パソコンはない」と回答した者を示す。

* 「メリットが大きい」は、「メリットが大きい」と「どちらかというメリットが大きい」の合計、「デメリットが大きい」は、「デメリットが大きい」と「どちらかというデメリットが大きい」の合計(%)

次に、表4 - 4 - 16をもとに、具体的な項目について見てみよう。まずは、パソコンを使うことのメリットとして設定した項目についてである。

「情報収集や情報活用の力が身につく」「学習に役に立つ」「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」「コミュニケーションや情報発信の力が身につく」「友だちとの関係づくりに役に立つ」「親子の関係づくりに役に立つ」のいずれの項目でも、子どもの利用頻度が高い群(「頻度高」)で「そう思う」「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以下同様)という回答の比率が高い。ここでも、子どもがパソコンをよく使っているケースでは、保護者はそのメリットを感じやすいようである。

学年別に見た場合も同様に、「頻度高」群の比率が高い項目が多い。ただし、「情報収集や情報活用の力が身につく」「学習に役に立つ」の2項目は、中学生段階になると「頻度低」群でもそのメリットを感じるようになるため、両群の差が小さくなる。

続いて、デメリットとして設定した項目について見てみよう。

まず、全体の数値をみると、「生活が乱れる」のみ両群の差が5ポイント以上開いている。「生活が乱れる」のではないかという懸念は、パソコンの利用頻度が低い「頻度低」群に強く表れている。

ただし、学年別に数値を丁寧に見ると、子どもの学年によって意識が異なることが分かる。子どもの学年が低いうちは、「頻度低」群の方が「生活が乱れる」と懸念する傾向があるのに対して、中学生になると「頻度高」群の方がそうした懸念を強く抱くようになっている。このような傾向は、「有害情報に接するのが心配である」の項目にも同様に見られる。子どもが小さいうちは、子どもからパソコンを遠ざけている保護者の方が不安感が高い。これに対して、子どもが成長すると、パソコンによく接しているほうが保護者の不安感が高まる様子がうかがえる。

表4 - 4 - 16 パソコンの利用に対する考え(学年別・パソコン利用頻度別) (%)

	全体		小1		小2		小3		小4	
	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低
情報収集や情報活用 の力が身につく	93.1	> 83.7	84.8	> 77.7	86.3	72.5	90.6	> 84.3	93.6	83.0
学習に役に立つ	91.0	> 83.0	89.9	79.3	95.0	80.8	91.8	> 82.6	90.4	76.4
音楽やゲームなど 気分転換に役に立つ	56.2	37.0	46.8	34.7	58.8	33.3	52.9	37.4	46.8	35.8
コミュニケーションや情報 発信の力が身につく	47.7	32.7	36.7	36.4	41.3	> 33.3	38.8	> 31.3	38.3	> 31.1
友だちとの関係づく りに役に立つ	35.8	20.6	19.0	19.8	28.8	16.7	29.4	> 20.9	25.5	> 19.8
親子の関係づくりに 役に立つ	28.9	17.6	20.3	21.5	31.3	15.0	34.1	23.5	24.5	> 17.0
有害情報に接するの が心配である	78.6	80.1	64.6	81.0	78.8	81.7	76.5	79.1	80.9	80.2
犯罪に巻き込まれな いか心配である	55.0	58.7	49.4	65.3	55.0	59.2	50.6	60.9	60.6	> 53.8
生活が乱れる	38.0	< 43.2	32.9	50.4	42.5	< 49.2	30.6	45.2	42.6	44.3

	小5		小6		中1		中2		中3	
	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低	頻度高	頻度低
情報収集や情報活用 の力が身につく	95.5	> 89.9	96.2	85.7	93.4	> 87.5	92.6	92.3	98.0	96.2
学習に役に立つ	92.8	> 84.3	95.4	> 85.7	89.0	90.6	85.8	86.5	91.2	92.5
音楽やゲームなど 気分転換に役に立つ	53.2	31.5	51.5	41.4	58.8	35.9	58.8	40.4	69.4	52.8
コミュニケーションや情報 発信の力が身につく	39.6	28.1	50.0	32.9	50.7	25.0	56.1	40.4	61.2	37.7
友だちとの関係づく りに役に立つ	27.0	> 20.2	36.9	20.0	40.4	20.3	48.6	21.2	47.6	34.0
親子の関係づくりに 役に立つ	23.4	7.9	35.4	21.4	29.4	14.1	28.4	15.4	30.6	> 20.8
有害情報に接するの が心配である	79.3	< 86.5	83.8	80.0	72.8	< 79.7	84.5	> 76.9	80.3	69.8
犯罪に巻き込まれな いか心配である	55.0	< 60.7	59.2	58.6	55.9	54.7	60.1	59.6	47.6	49.1
生活が乱れる	36.0	< 44.9	44.6	40.0	39.0	25.0	37.8	48.1	34.7	24.5

* 「頻度高」は子どもが使えるパソコンがある者のうち「かなり使っている」「まあ使っている」と回答した者、「頻度低」は子どもが使えるパソコンはあるが「あまり使っていない」「まったく使っていない」と回答した者、および「パソコンはあるが子どもは使わない/使わせない」「パソコンはない」と回答した者を示す。

* 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計(%)

* 「頻度高」と「頻度低」の間で5ポイント以上の差があるものには<>、10ポイント以上の差があるものには を付してある。

自由記述

ここでは、「あなたは、お子様がパソコンを使っていてよかったと感じることがありますか」とたずねた質問、および、「お子様がパソコンを使っていて困ったことや失敗したと感じることがありますか」とたずねた質問に対する自由記述の回答を分析する。保護者が感じるパソコン利用のメリット/デメリットを、具体的な例から確認しよう。なお、()内には回答者の子どもの学年・性別・子どもとの続柄を記入している。また、記述は、明らかな誤字脱字を除き、原文どおりとした。

1)保護者が感じるパソコンのメリット

最初に、「メリット」について見ていこう。とくに多かった回答は「調べ物をする」「勉強に役立つ」「パソコンの操作方法を覚える」「将来的に必要」の4点である。

「調べ物をする」には、「自分で調べるようになった」「興味が広がった」という、子どもの積極性や主体性の高まりを評価する声も目立った。

- ・分からないことを自分で調べるようになった(小4生・女子・父親)
- ・調べ物の幅が広がった点(小5生・女子・父親)
- ・例えば学校で「原爆ドーム」について勉強してきた時、帰ってきてから検索したりしてさらに詳しく調べたりしています。為になる使い方だけしてくれているので安心です(小4生・男子・母親)
- ・わからないことなど、百科事典などを利用していたころよりも積極的にインターネットで調べようと言う意識が高まったような気がします(小2生・女子・母親)
- ・インターネットを使っているんな調べ物をして、興味を持つことが出来る。特に画像等でそのものの形等を知ることが出来る(小3生・女子・父親)
- ・情報収集の手段として役立てられる(小6生・女子・父親)
- ・必要な情報を自分の力で収集できるようになった(中1生・男子・父親)
- ・自分の夢が見つけられた(小6生・女子・母親)
- ・趣味や興味の幅が広がった(中2生・男子・母親)
- ・好奇心が旺盛になった(小1生・男子・父親)

「調べ物をする」のに役立つという回答と似ている意見として、「勉強に役立つ」という声も多かった。具体的には、宿題、総合的な学習、自由研究などの課題が解決できるといった例が目立った。

- ・調べ学習の宿題を自分で解決している(小6生・男子・父親)
- ・最近資料集めなど、パソコンを使って調べてくるような宿題もあり、学校自体がパソコンが家にあるのは当然といったような感じですが、きっちり子どもも対応できるので良かったと思います(中2生・

女子・母親)

- ・勉強に役立つ(中2生・男子・母親)
- ・学習で分からないところを、色々な条件で教えることができる(小2生・女子・父親)
- ・夏休みの自由研究などで調べたりするのに便利(小5生・男子・父親)
- ・総合学習の調べ物など自分でやろうとしている(小4生・女子・父親)

「パソコンの操作方法を覚える」では、とくに「文字入力」への評価が高かった。また、文字入りに慣れることから「アルファベットを覚える」という利点を指摘する声も、小学生の保護者のなかに多く見られた。

- ・操作について早く覚えることができる(小5生・女子・父親)
- ・パソコンに対して苦手意識がない(小1生・女子・母親)
- ・キーボードやマウスの操作が上手になった(小5生・男子・母親)
- ・キーボードのブラインドタッチが出来るようになった(小2生・女子・父親)
- ・文章などを打つため、ローマ字を自然に覚える(小3生・女子・父親)
- ・アルファベットを覚えたこと(小1生・男子・父親)
- ・ローマ字入力なので小学生の時にローマ字を覚えたこと(中2生・男子・父親)

そして、今の時点では具体的なメリットを感じないものの、「将来的に必要」「時代の流れ」であるという声も目立った。

- ・将来に役立つ(小2生・女子・父親)
- ・これからの時代はパソコンくらいは最低限使いこなせないと就職に影響するので早めに覚えた方が得策と思う(中2生・男子・父親)
- ・社会に出るとパソコンは必須であるので、早く習得できる(中2生・女子・父親)
- ・特に良かったとは感じないが、これからの生活の中で必要不可欠な、と思って使わせている(中2生・女子・母親)
- ・時代についていける(小6生・女子・母親)

さらに、少数ではあったが、次のように家族関係や友人関係に言及した意見もあった。

- ・兄妹で仲良くゲームなどをしているのを見るとほのぼのする(小1生・女子・母親)
- ・離れた友達とのメールのやりとり(中2生・男子・母親)

2)保護者が感じるパソコンのデメリット

一方で、デメリットもいくつか指摘されている。意見として多かったのは、「視力が悪くなる」「使いすぎ」「トラブル」「親が使えない」の4つである。

「視力が悪くなる」という声はとくに多かった。他にも、夜更かしを心配する声もあり、健康面や生活習慣を懸念している様子うかがえた。

- ・目が悪くなる（小3生・女子・母親）
- ・視力が落ちているので、画面に近づきすぎることが困る（小2生・女子・母親）
- ・夜更かしと朝寝坊（小1生・男子・父親）
- ・寝る時間が遅くなる（小4生・男子・母親）

「使いすぎ」の指摘も多く、長時間にわたる利用を懸念する声が目立った。具体的な利用目的としては、とくに「ゲームのしすぎ」という声が、自由記述全体のなかでもかなり多くなっていた。さらには、ルールを守れずに、つい使いすぎてしまう現状を指摘する声も多かった。

- ・遊んでばかりいる（中2生・男子・父親）
- ・長時間の使用（小4生・女子・父親）
- ・時間を気にせず夢中になってしまう（小6生・女子・母親）
- ・使用時間の制限を守れない（小2生・男子・母親）
- ・チャットにはまった時期があった（中3生・女子・母親）
- ・ゲームを長時間している（小1生・女子・父親）
- ・オンラインゲームで時間を無駄に使う（小5生・男子・父親）
- ・オークションに、はまってしまった。今は禁止している（中3生・男子・父親）

また、さまざまな「トラブル」が発生しているという声も目立った。本人の気づかないうちに、あるいは親の知らないところでのトラブルや利用状況に困惑している様子うかがえた。

- ・親の知らないところで使う（中1生・男子・父親）
- ・親のいないときにアダルトサイト等を興味本位でのぞくこと（中2生・女子・母親）
- ・変なメールが送られてくる（小6生・男子・父親）
- ・間違っアダルトサイトをクリックしてしまったこと（小6生・男子・父親）
- ・知らないサイトに行ってウィルスに感染してしまう（小6生・男子・母親）
- ・本人は意図せずチャット荒しに模され、メールアドレスを公開され、乱用された（小5生・女子・父親）
- ・よくフリーズさせてしまう事（小6生・女子・母親）

家族共用のパソコンを利用しているケースに対して、子どもが使うと「親が使えない」という声も聞かれた。他の家族への影響も少なからずあるようだ。

- ・自分が使いたい時に使えない時があった（中1生・女子・母親）
- ・仕事ができない（中1生・男子・母親）
- ・家族共用のパソコンなので、しょっちゅう彼女のせいでメモリ不足になることが困ります（小3生・女子・母親）
- ・勝手に必要なファイルを消されてしまった（中2生・男子・父親）

これまで述べてきた回答に比べると少数派ではあるが、「字が書けなくなる」「インターネットに頼りすぎる」といった意見も散見された。

- ・漢字を読むことは出来ても、書くことが出来ない（中2生・男子・父親）
- ・検索エンジンを使うクセを付けると辞書をひかなくなったので、宿題をする時は使用しないように怒らないといけない（小2生・男子・母親）
- ・何でもかんでもインターネットでという考えが多く、辞書などを使う機会が少なくなった感じがする（中1生・男子・父親）

以上みてきたように、自由記述では、子どものパソコン利用のメリットとして「自分で調べ物をする」「興味が広がる」「勉強に役立つ」「パソコンの操作方法を覚える」「将来的に必要」などの意見が多く見られた。また、デメリットとしては、「視力が悪くなる」「(とくにゲームの)使いすぎ」「トラブル」「自分が使えない」「字が書けなくなる」などの意見が多くあげられていた。

5. 「メディアを活用する力」の教育に対する意見

本章の最後として、「メディアを活用する力」の教育について保護者がどのような意見をもっているのかを概観したい。保護者は、どのような場で、誰が、どのような内容の教育をすることを望んでいるのだろうか。

(1) 教育の場

まずは、「メディアを活用する力」を子どもに教育する場について、保護者がどのように考えているかを確認しよう。表4-5-1は、「『メディアを活用する力』を子どもに教えるとしたら、どのようにするのがよいと思いますか」という質問に対する回答の結果を、全体、子どもの性別、父母別の順に示している。

全体の数値を見ると、「家庭と家庭以外の場の両方で教えるのがよい」がもっとも多く、65.3%にのぼっている。続いて多いのは「主に家庭で教えるのがよい」とした人(25.8%)である。合わせておよそ9割が、家庭を重要なメディア教育の場として捉えているが、家庭以外に期待する人も多いことが分かる。

続いて、父母別に傾向が異なるかを確認しよう。表を見ると、父親・母親ともに「家庭と家庭以外の場の両方」での教育を求める傾向が強い。ただし、その比率は、父親61.3%に対して母親70.3%となっており、さまざまな場面での教育を求める傾向は母親に強いことが分かる。一方、「主に家庭で教えるのがよい」と回答した比率は、母親が21.1%なのに対して父親は29.8%となっており、父親の方が9ポイントほど高い。

先に、自分と子どものどちらがパソコンの使い方に詳しいかをたずねた結果(表4-3-4)を紹介したが、母親に比べて父親の方がパソコンの利用について自信をもっている様子があらわれていた。このことを反映してか、父親は家庭での教育を重視する傾向が強いのに対して、母親は家庭と同時に外部での教育にも期待する様子が見えてくる。

表4-5-1 「メディアを活用する力」の教育の場(全体、性別、父母別) (%)

	全体	男子	女子	父親	母親
主に家庭で教えるのがよい	25.8	26.7	24.8	29.8	21.1
主に家庭以外の場で教えるのがよい	5.9	6.0	5.8	6.3	5.4
家庭と家庭以外の場の両方で教えるのがよい	65.3	63.5	67.5	61.3	70.3
子どもに教えるのは早い/教える必要はない	2.9	3.7	1.9	2.6	3.2

(2) 家庭以外の場での教育に対する期待

それでは、家庭以外の教育の場として、どのような主体が「メディアを活用する力」の教育を行うのがよいと考えているのだろうか。表4-5-2は、前の設問で「主に家庭以外の場で教えるのがよい」、もしくは「家庭と家庭以外の場の両方で教えるのがよい」と回答した者に限って、「家庭以外の場として、どこが『メディアを活用する力』を教えるのがよいと思いますか」とたずねた結果を示している。

複数回答形式で期待する主体をすべて選んでもらったところ、もっとも多かったのは「学校」(96.3%)という回答であった。次いで多いのは「自治体(図書館や児童館)」で、39.5%である。「通信事業者」「民間の教室」「NPO法人」はそれらに比べると低い割合だが、それでも10~15%の保護者が期待を寄せていることが分かる。学校や図書館、児童館など、子どもが通いやすい場を中心に選ばれているが、それ以外の場にも一定の期待があるようだ。

表4-5-2 家庭以外の場に対する期待(全体、性別) (%)

	全体	男子	女子
学校	96.3	95.4	97.2
自治体(図書館や児童館など)	39.5	40.1	38.9
通信事業者(電話会社など)	15.9	14.5	17.4
民間の教室(塾やパソコン教室など)	15.2	15.1	15.3
NPO法人	10.1	10.0	10.2
その他	0.7	0.7	0.7

*複数回答。

*「メディアを活用する力」の教育主体についての設問で、「主に家庭以外で教えるのがよい」「家庭と家庭以外の場の両方で教えるのがよい」と回答した者のみが回答している。

(3) 必要だと思う教育内容

全体の傾向

次に、「メディアを活用する力」の教育内容についてたずねた結果を見てみよう。ここでは、「メディアを活用する力」の教育主体に対する設問で、「子どもに教えるのは早い/教える必要はない」と回答した以外の者に意見を聞いている。

表4-5-3は、「子どもに対して、具体的にどのようなことを教える必要があると思いますか」という質問に対する回答の結果を、全体、子どもの性別、父母別の順に示した。数値は、「必要」(「とても必要」と「まあ必要」の合計)と回答した比率を示している

はじめに全体の傾向を見てみると、どの項目に関しても高い期待が寄せられていることが分かる。とくに、「使うときのマナーやモラル」(99.0%)、「インターネットなどの危険性」(98.8%)、「多くの情報から正しい情報を選び取ること」(98.3%)、「多くの情報を整理し保存すること」(89.5%)の4項目は、ほとんどの保護者が「必要」だと認識している。相対的に見て「必要」という回答が少なかったのは、「自分から情報を発信すること」(45.4%)で、唯一半数以下であった。とはいえ、保護者はさまざまな内容の教育の必要性を認識しているといえる。

こうした結果を父母別に見たところ、多くの項目で差は見られなかったが、唯一「自分から情報を発信すること」では、父母間で大きな差が見られた。「必要」とした父親は49.9%とおよそ半数に達するのに対して、母親では10ポイントほど低い40.0%にとどまった。

学年別の傾向

次に、表4-5-4に基づいて、学年別の傾向を見てみよう。

「高度化する機器の使い方」は、小1生で「必要」とした人が76.7%であるのに対し、中3生では84.5%に達している。小6生(81.9%)、中2生(83.8%)と合わせて3学年で80%以上の保護者が「必要」としていて、小学校高学年から中学生にかけて、とくに必要とされている内容であると考えられる。また、「自分から情報を発信すること」も、小学校高学年から中学生でとくに期待されている内容である(小1生43.9%<中3生51.5%)、小6生から比率が高まり、中2生では52.8%に達している。

こうした傾向から、教育の必要性の認識は学年を問わず全般的に高いものの、子どもがICTメディアに触れる機会が増大する小学校高学年段階からいっそう高まるものと推察される。

以上、「メディアを活用する力」の教育に対する期待を分析してきた。教育の場としては、全体として「学校」への期待が大きいのが、他の機関や主体に対する期待も一定程度見られた。また、教育内容についての必要性に関する認識は多岐にわたっており、「使うときのマナーやモラル」「インターネットなどの危険性」「多くの情報から正しい情報を選び取ること」といったメディアリテラシーの基礎にあたる内容はもちろんのこと、学年が上がると「高度化する機器の使い方」「自分から情報を発信すること」なども注目されるようになることが示された。

表4 - 5 - 3 必要だと思う教育内容(全体、性別、父母別) (%)

	全体	男子	女子	父親	母親
使うときのマナーやモラル	99.0	99.1	98.8	98.5	99.5
インターネットなどの危険性	98.8	99.0	98.4	98.5	99.1
多くの情報から正しい情報を選び取ること	98.3	99.0	97.7	98.6	98.0
多くの情報を整理し保存すること	89.5	89.6	89.4	90.8	88.0
高度化する機器の使い方	79.6	81.6	77.3	80.8	78.0
自分から情報を発信すること	45.4	47.6	42.9	49.9	40.0

*数値は「とても必要」と「まあ必要」の合計(%)

*「メディアを活用する力」の教育主体についての設問で、「主に家庭で教えるのがよい」「主に家庭以外で教えるのがよい」「家庭と家庭以外の場の両方で教えるのがよい」と回答した者のみが回答している。

表4 - 5 - 4 必要だと思う教育内容(学年別) (%)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
使うときのマナーやモラル	98.4	99.5	100.0	98.5	99.5	99.0	97.9	99.0	99.0
インターネットなどの危険性	96.3	98.4	99.5	98.5	99.5	99.5	98.5	99.4	99.0
多くの情報から正しい情報を選び取ること	96.3	100.0	98.9	97.4	97.4	98.0	98.4	99.5	99.0
多くの情報を整理し保存すること	88.9	86.8	89.5	85.9	86.1	91.5	93.9	91.9	90.5
高度化する機器の使い方	76.7	77.8	79.0	75.9	76.4	81.9	79.8	83.8	84.5
自分から情報を発信すること	43.9	46.0	42.6	35.1	39.0	47.2	49.5	52.8	51.5

*数値は「とても必要」と「まあ必要」の合計(%)

*「メディアを活用する力」の教育主体についての設問で、「主に家庭で教えるのがよい」「主に家庭以外で教えるのがよい」「家庭と家庭以外の場の両方で教えるのがよい」と回答した者のみが回答している。

まとめ

各節の知見を要約し、本章のまとめとする。

第1節では、本章で用いた保護者に対するWEB調査の概要を整理した。

第2節では、保護者から見た子どものICTメディアの所持率・利用頻度を分析した。今回の調査対象は、携帯電話もパソコンも、非常に高い所持率/所有率であった。このことは、WEBアンケートであることが影響しているものと考えられる。

携帯電話については、女子の方が「自分専用の携帯電話」の所持率が高く、また子どもが積極的に持ちたがっている様子が示された。また、利用頻度に関しても、保護者は女子の方が若干高いと認識していた。学年では、中学生になると多くが「自分専用の携帯」を所持する傾向にあった。

パソコンについても保護者は、学年が上がるにつれて子どもが利用できる状況が整い、利用頻度も高くなっていると捉えていた。とくに中学生の利用頻度が高くなるのは、携帯電話と似た傾向である。また、子どもが利用できるパソコンに関しては、保護者の最終学歴が高いほど比率が高くなる傾向が見られた。

第3節では、子どものICTメディア利用に対する保護者のはたらきかけを分析した。保護者は、さまざまな点で子どもの利用状況に関与していた。

携帯電話では、とくに「使い方の把握」「公共の場でのマナーを教える」というはたらきかけが多かった。これらはどの学年にも共通する取り組みであることが分かった。利用上のルールを決めるケースは、学年があがるにつれて少なくなっていた。他方、「携帯電話の危険性について話」をしたり、「料金をおこづかいから負担」させたりするのは、学年があがるにつれて多くなっていた。また、全体として父親よりも母親の方が熱心に関わっていることも分かった。

パソコンでは、多くの項目で学年が上がるにつれて保護者の取り組みが減少するが、「インターネットなどの危険性」を話す保護者は逆に増加していた。利用に関するルール決めが減少する一方で、利用にあたっての危険性を話すようなはたらきかけが増加する傾向は、携帯電話と共通すると言えるだろう。また、実際の使い方を指導するのは父親に多く、利用に関しての取り決めなどを行うのは母親の方が多いという傾向も明らかになった。

第4節では、子どものICTメディア利用に対する、保護者のメリット/デメリットの認識について分析した。

携帯電話の利用に関しては、子どもの学年があがるにつれてメリットが強く認識される傾向にあり、とりわけ中学生の保護者に顕著であった。子どもが中学生だと、「友だちとの関係づくりに役に立つ」「音楽やゲームなど気分転換に役に立つ」などへの評価が目立って高まる。また、父親の方が全体としてはメリットを評価しており、母親はメリットとなる部分も十分に認識しているものの、デメリットがあることも強く感じているようだ。子どもの携帯電話の所有状況では、全体的に、「子どもが携帯電話をもっている」保護者の方が「メリットが大きい」と感じ、「もっ

ていない」保護者の方が「デメリットが大きい」と感じる傾向にあることが分かった。

自由記述からは、メリットとして「連絡のとりやすさ」「所在が分かる」が多くあげられた。また、デメリットとしては「料金が高い」「使いすぎ」などの回答が目立っていた。

パソコンの利用に関して、全体では「情報収集・活用の力が身につく」「学習に役に立つ」といった項目が高く評価されていた。携帯電話と同様に、中学生になるとメリットが強く認識される傾向にあることが分かった。また、子どものパソコン利用頻度が高いほど、保護者はそのメリットを高く評価する傾向にあることが分かった。しかし、デメリットとなる点（「有害情報に接するのが心配である」など）については、子どもの利用頻度に関わらず、懸念している様子が見えられた。

自由記述では、携帯電話以上にメリットが幅広くあげられており、「自分で調べ物をするようになった」「興味が広がった」「勉強に役に立つ」などの回答が多かった。また、文字入力を経験することから、小学生の保護者からは「アルファベット（ローマ字）を覚える」という声も聞かれた。今の時点では具体的なメリットは分からないものの、「将来的に必要」とする保護者も存在していた。一方、デメリットとしては「視力が悪くなる」「トラブルの発生（ウイルス感染、フリーズなど）」「親が使えない」「使いすぎ」という指摘があった。とくに、「ゲームのやりすぎ」への言及が多く見られた。

第5節では、「メディアを活用する力」の教育に対する保護者の期待について分析した。全体としては、家庭と家庭以外の場の両方に対する期待が高く、家庭以外の場についてはほとんどの保護者が「学校」を期待する教育主体として選択していた。また、教育内容についても、「インターネットなどの危険性」「多くの情報から正しい情報を選び取ること」をはじめ、多くの点に高い必要性を感じているようだった。